

楽園 第1話

takamiism

『穴がない』

「あれ、どこだったかな？」

「何か、探しもの？」

「うん、穴を」

「え、穴？」

「世界の穴」

「それ、何？」

「この世界には穴がないな、と思ってね」

「穴なら、いくらでもあるんじゃない？」

「たとえば、部屋には出口があるよね？」

「開かずの間、というものもあるけど」

「たとえ開かなくても、扉はあるわけだ」

「一応、部屋だからね」

「家には、ドアがあるよね？」

「鍵が、かかっていたりはするけど」

「壊せば、出入りできるわけだ」

「一応、家だからね」

「ところが、この世界には、それが無い」

「この世界？」

「この現実、というべきかな」

「どういうこと？」

「どこまで行っても、現実だよ」

「どこまでも？」

「そう、はてしなく」

「空想や妄想は、現実にはないんじゃない？」

「まず、空想や妄想として、現にあるんじゃない？」

「でも、現にないから、空想や妄想と呼べるような」

「現にないという形で、あるわけだ」

「ないけど、あるの？」

「まず、空想や妄想は、空想や妄想として、出現しなければならない」

「変な言い方をするね」

「空想や妄想以外にも、当てはまるよ」

「というと？」

「何かがあるにせよ」

「ないにせよ」

「まずは、それとして出現しなければならない」

「出現しなければ、どうなるの？」

「何も」

「ない、ということ？」

「いや、少し違うかな」

「どこが？」

「何も起こらない」

「やっぱり、ないわけだよね？」
「あるとか、ないとか言う以前の、『あり・なし』の手前の話をしているんだよ」
「その手前というのは、どこにあるの？」
「はてさて」
「え？」
「そこというか、それというか」
「ぼんやりしているね」
「目には見えないもので」
「へえ、そういうものなんだ」
「目に見えるものを通して、浮かび上がってくるというか」
「でも、そういうものとしてあるんでしょ？」
「あるとも、ないとも、言えない」
「どちらでもない？」
「どちらとも言えない」
「よくわからないけど」
「現実を語りつくすには、言葉が足りない」
「どうして、足りないのかな？」
「さあ、わからない」
「あっさりと、認めるね」
「わからないことが、わかったからね」
「だから？」
「もう十分だね」
「ここで終わり、ということ？」
「いや、また新しく、ここから始まる」
「ここは、どこ？」
「それは、すばらしいね」
「そうかな」
「その質問には、穴がない」

楽園 第2話

takamiism

『穴しかない』

「たしか、『現に』についての話が、あったよね？」

「まさに」

「それは、いつのことなの？」

「まさに今」

「今この瞬間、ということ？」

「そうとも言えるかな」

「それなら、過去と未来も、あるわけだ」

「どうして？」

「今というのは、現在のことだよね？」

「『現に』は、『現在において』の省略形と言えるかもね」

「現在ということは、過去・現在・未来というふうにならっているんじゃないの？」

「前後に、何かがある？」

「何かというか、時間というか」

「でも、時間というのは、そんなふう一直線になっているかな？」

「あれ、違う？」

「むしろ、どうして、そう思うの？」

「いや、どうして、と言われても」

「それが何であるにしろ、現に今しかないんじゃない？」

「あれ、似たような話を、前にもしたような」

「そうだよ」

「そうすると、過去や未来は、どうなるの？」

「それは、同じもの？」

「え？」

「まずは、過去から考えてみよう」

「過ぎ去ったものことだね」

「今は、ない？」

「もう、ない」

「かつては、あった？」

「うん」

「それは、どこへ行ったんだろう」

「どこへ、というのは、何が？」

「過去は、消え去ったのかな？」

「今は、ないよね」

「過ぎ去り、消え去ったものは、過ぎ去り、消え去ったものとして」

「あれ、それは」

「まずは、出現しなければならない」

「また、それ？」

「次は、未来について、考えてみよう」

「まだやってきていないもの、ということかな」

「今は、ない？」

「まだ、ない」

「いまだやって来ていないものは」
「いまだやって来ていないものとして」
「まずは」
「出現しなければならない？」
「その通り」
「だいたい、わかってきたよ」
「それは、また」
「それが、『現に』というやつなんだよね？」
「とりあえずは、そう呼んでおこう」
「本当は、違うの？」
「いや、わからない」
「自分で名づけたのに」
「たとえば、『今』と言ってもいいし、『ここ』と言ってもいいかもしれない」
「色々な呼び方が、あるんだね」
「いずれにせよ、それしかない、という意味だけど」
「それ？」
「これしかない、というか」
「他のものがない、ということ？」
「比較できるようなものが、ない」
「でも、『今』なら、『過去』や『未来』と比べることができるよ」
「そうだね」
「認めちゃったよ」
「だから、言い方として、適切ではないかもしれない」
「『ここ』も、『そこ』や『あそこ』と比べることができるね」
「その言い方も」
「不適切？」
「かもしれない」
「では、どういうふうに言えば、適切な言い方になるの？」
「できないかもしれない」
「そうなの？」
「言葉には、できないかもしれない」
「言葉にできない、という言葉にはなっているけど」
「言葉の限界、だよな」
「でも、言葉の限界という言い方は、できるんだね」
「言葉にすることで、言葉の中に入ってくる」
「でも、言いつくせない？」
「言葉にすることで、言葉にできない何かがある、ということが、よくわかる」
「たとえば、神さまは、どうなるの？」
「超越した存在のこと？」
「ここまでの『現に』についての話は、どこことなく、神さまに似ているよね」
「神は、神として」
「はいはい、わかったよ」
「だから、『現に』は神よりも強い、と言ってもいい」
「強いなの？」
「あらゆるところ、あらゆるときに、『現に』あるわけだから」
「目には見えないんだったね」

「『現に』という神は超越していない、と言いかえてもいいかもしれない」

「また、難しくなってきたね」

「要するに」

「おや、まとめてくれるんだ」

「神は我と共にあり」

楽園 第3話

takamiism

『穴の前で』

「ここしばらく、『現に』の話をしているけれど」

「そうだったね」

「その『現に』というのは、何の説明にもなっていないような」

「何かを証明したいわけではないからね」

「何も解明しないの？」

「論証したいわけでもない」

「相手を説得できないんじゃない？」

「説得しようと思っていないよ」

「では、どうしたいの？」

「すべてを、そのままにしておきたい」

「それなら、長々と言わなければいいんじゃない？」

「ごもつとも」

「認めちゃったよ」

「ついつい、言いたくなって、考えたくなるもので」

「どうして？」

「きっと、目の前にあるものを受け入れるための儀式なんだね」

「儀式が必要なものなの？」

「普段は、気がつかないからね」

「気づいたとして、どうにかなるもの？」

「どうなるわけでもない」

「儀式までしたのに？」

「そのままにしておくわけだから」

「何もしないんだ」

「ただ、それをそれとして、認めるだけ」

「それに、意味、ある？」

「ないといえば、ない」

「あるといえば、ある？」

「あえて言うなら、認識こそ力なり、ということかな」

「何だか、難しい言い方だね」

「そういう言い方もできる、ということで」

「でも、認識しても、どうにもならないんだよね？」

「どうにもならない、ということが、わかるわけだ」

「だから、それが何になるわけ？」

「運命論という考え方が、あってね」

「あれ、話、変わった？」

「聞いたこと、ある？」

「『起こることは、すべて、あらかじめ決まっている』という考え方のこと？」

「普通の運命論では、そうだね」

「普通の？」

「いわゆる運命論、弱い運命論、と言ってもいい」

「ということは、強い運命論も、あるの？」

「起こることは、すべて、現に起こる」
「お、きたね」
「慣れてきた？」
「そろそろね」
「あらかじめ、決まっているわけではない」
「え、どういうこと？」
「たとえると」
「たとえなくても、いいけど」
「何か、神さまのようなものが、世界の背後にいて」
「超越的な神さま、だったよね」
「すべてを見通したり」
「監督したり、裁いたり」
「などということは、ない」
「また、『現に』の話だね」
「その神さますら現れさせるような、力のようなもの」
「ようなもの？」
「力というか、動きというか」
「ぼんやりしてきたね」
「はっきりとは、わからないもので」
「一言でいうと？」
「あるようにある」
「本当に、そうなのかな？」
「さあ」
「また、そんな」
「あくまで、仮説です」
「説明は、しないんじゃないかった？」
「とりあえず、こうかな、というところで」
「あとで、その仮説を変えることもあるの？」
「もちろん」
「どういう基準で？」
「サイズの合っていない服を着ている時のような、息苦しさを感じた時かな」
「また、たとえが出てきたね」
「潔く」
「変える？」
「捨て去る」
「そうやって、進んでいくんだ」
「じっくり、ゆっくり」
「最終的に、どうなるの？」
「今、ここにいることを確認する」
「やっぱり、それだけ？」
「たった、それだけ」
「それだけのために、今、こうして対話をしているの？」
「それが、哲学というものだよ」
「そうなんだ」
「すばらしいでしょ？」
「えっと、どこが？」

楽園 第4話

takamiism

『穴の向こうへ』

「運命論の話が、あったけど」

「とても、強いよ」

「あらかじめ、決まってははいない？」

「あるようにある、それだけだね」

「そうすると、何をしても無駄、ということ？」

「また、性急だね」

「そういう運命なんだよ」

「運命というのは、何の運命？」

「何の？」

「誰の、と言ってもいいけど」

「もちろん、自分の運命、だよな？」

「それだけ？」

「それ以外に、ある？」

「あるいは」

「何？」

「その自分というのは、何？」

「いや、何と言われても」

「どこから、どこまでが、自分なのかな？」

「自分の場所の話を、しているの？」

「自分という場所のことかな」

「意味が、よくわからなくなってきた」

「ニライカナイの穴、というものがあってね」

「何、それ？」

「太陽が生まれ、やがて消えていく穴のこと」

「そうなんだ」

「ま、そういうことです」

「え、どういうこと？」

「どういうわけだか、知らないけど」

「よくわからないんだったね」

「流れているものが、一瞬の間、集まって、離れて」

「どうなるの？」

「また、流れていく」

「一瞬の間に？」

「無限と有限、その間というか」

「また、難しい言い方をして」

「そこに永遠が、透かして見えるというか」

「えっと、何の話だったっけ？」

「私と世界は、切り離すことができない、という話」

「別々のものなの？」

「私というものがなければ、世界は立ち上がってこない」

「はじめにあるのは、私？」

「でも、世界がなければ、私というものは、こうして出てくることはなかった」
「それなら、世界が、先にあるの？」
「私と世界は、共にある」
「何やら、結論みたいなものが、出てきたね」
「もうここで終わり、というわけではないよ」
「でも、一応とはいえ、答えなんじゃないの？」
「謎は、謎のまま、残るんじゃないかな」
「ここまで、色々と話してきたのに？」
「ようやく、たどり着いたわけだ」
「どこに？」
「はじまりの場所に」
「おや、まだ、はじまってなかったの？」
「また、はじまるわけだよ」
「今度は、どこへ向かうの？」
「わからない」
「はいはい」
「ただ、挑み続けるだけ」
「それで、何から、手をつける？」
「探すところから」
「何を？」
「穴をね、ちょっと」